



日伊文化協会ふじ会

オーメ (OME)

歴史、地理、文化、慣習、気候、交通、産業、教育、その他

イタリア・ロンバルディア州の小さな町、オーメの概要について

2024年12月18日 ブレーシャにて

日伊文化協会ふじ会

登記住所：Via A. Del Verrocchio 154-25124 Brescia

E-mail: presidente@fujikai.it

<http://www.fujikai.it>

第三セクター(RUNTS)

2023年3月31日 リスト NO.108529

税務コード：98096030170

C/c presso Banca Intesa Sanpaolo SWIFT/BIC BCITITMM;

IBAN: IT21X0306911255 100000000940

P2

このレポートは、イタリア国ブレージャ県フランチャコルタ地区に属するオーメ市について、様々な側面からその特徴を記し、日本の青梅市とイタリアのオーメ市との間で、今後、姉妹都市交流事業を実現するために、参考資料として使用する目的で作成されたレポートである。



オーメ

オーメ市の特徴、地形、河川

オーメ市は、海拔 240m のフランチャコルタという名称地域の北東部に位置し、イゼオ湖からほど近い地域にある。この町は、緑と森、アルプス山脈の中心で南

部の中程度の高さの山や、葡萄、オリーブの畑に囲まれた自然豊かな丘陵地である。オーメ市の土地は、ガンドヴェーレとマルティニャーゴの溪流をまたぐ9、9平方キロメートルの面積に及ぶ。

オーメ市には中心からほど近い地域に多くの集落があり、その名を挙げると次のとおり。

アッシオーネ、バルケ、ボルボーネ、チェレッツァータ、クリニカ、クルマ、フォンテ、ゴイアーネ、リッツァーナ、マエストリーニ、マッリオ、マイオリーニ、マルティニャーゴ、ピアネッロ、ピアッツァ、スコリーネ、セルサーネ、ヴァツレ。

そのうち、主な集落は、チェレッツァータ、マルティニャーゴ、ヴァツレ、ピアッツァです。

オーメ市の中心部には大きな産業地域は存在しないが、居住地域の郊外にいくつかある。(スコリーネ通り、プリモマッジョ通り、プロヴィンチャーレ通り。)観光地として魅力的な場所は複数あり、丘や公園などの自然エリアと、色々な時代のモニュメントがある。また、とても重要な観光地として世界から人々が訪れる、フランチャコルタがある。さらに人々を惹きつけるのは、古くから街にたた

ずむ教会と、芸術的にも歴史的にも興味深いボルゴ・デル・マッリオ、フランチャコルタで有名なワインセラー、ワインを販売するカンティーネ。

観光客を受け入れる為の主要ホテルは2つあり、ラ・フォンテ（4つ星ホテル）と、サン・ミケーレ（2つ星ホテル）がある。そのほかにも、アグリツーリズムや、B&B（朝食付き宿泊施設）もたくさん存在する。

P3

2. 気候

オーメ市が位置する丘陵地帯はアルプスの麓にあり、一年を通して過ごしやすい気候といえる。しかし、山麓地帯なので、アルプス山麓特有の気温変化がある。四季の移り変わりは、はっきりとした変化があり、ここ数年では夏はとても気温が高くなり、冬は最低気温がマイナス0度を下回る。夏場の平均気温は15～20度ではあるが、最高気温が30度程になることもある。

温暖化現象の影響で、近年の傾向としては、夏の気温が年々高くなりつつあり、冬は非常に低くなっている。これは、より頻度が高まっている集中豪雨や、夏場の霰の原因となる気温の急激な上昇や急降下といった、異常気象によるもので

ある。年間で一番寒い時期には、パダーナ平野の近くに位置することで、冬季には夜にかけて霧が発生する。しかし周囲を丘に囲まれていることによって、他の地域とは少し異なり、年に数日ほど日中にも霧が見られることがある。

また冬季には丘が雪に覆われることもあり、夏には木の幹に留まる蝉の声がミンミンと鳴り響く。このような特徴ある気候の移り変わりの中でオーメ市民は暮らしている。



写真：オーメ、ワイン畑の写真

3. 人口

オーメ市の人口は現在、3150人で、住民の年齢別内訳は次のとおり。

0-19歳 550人

20-35歳 475人

36-50歳 629人

51-75歳 1147人

76-101歳 349人

ここ50年の人口推移は、わずかずつではあるが増加傾向にあったが、ここ10年ほどで減少した。平均寿命は延び続けている。

1970年代 2238人、1980年代 2445人、1990年代 2616人、

2000年代 2839人、2010年代 3273人、2020年代 3207人。



P4. 写真：オーメを見渡す風景

4、住民の特徴

オーメ市の住民は、他者を歓迎し受け入れる温かさを持ち、仲間との結束力が強く、アイデンティティーが確立している傾向がみられる。小さな町でありながらも、オーメ市はこれまでを形成してきた過去の歴史にしっかりと根を張った豊かな伝統を大切にしている。

また今、暮らしている地域、土地に深い愛着・絆を感じ、自然、生活サイクル、敬虔で篤い信仰心に強く結びついた文化を大切に守り続けている。市民は、異なる文化や伝統を持ち合わせた人々を迎え入れる気持ちが豊かで、親しみをもったふるまいや、歓迎ぶりが見られる。

街には人々の生活の特徴ともいえる交流の機会も多くある。家族やこの地域にゆかりある人だけに限らず、他の地域から来られる人々も受け入れ、有名な祭り行事にも友好的な雰囲気がある。この地域の伝統や歴史を人々に知ってもらいたいとの思いは、自分たちの町に誇りをもっているところからきている。

宗教的な祭りや、文化イベント、街の祝い事などには、多くの市民が参加し、ともに分かち合い、互いに成長する場となっている。未来へ開かれた、継続的な発展がみられるこの街で、市民は自分たちのアイデンティティーが培われてきたその価値を忘れずに過ごしている。

お互いのためになる行動を心がけるオーメ市民たちの絶え間ない努力は非常に素晴らしいものがある。街の環境保護や、この地域へのリスペクトは、皆で分かち合う、大切な価値ある振る舞いである。市民一人一人が、街の清潔さを保ち、わが町へ迎え入れる立場であるとの、自分自身の責任を自覚している。

災害時や緊急時、また国のみならず、世界的にひっ迫した状況には、オーメ市民は団結して組織を編成し、必要とされる場所へ力を合わせて向かう協力的な体制を組む。

つまり、オーメ市民たちは社会的に結束した姿の模範であり、また、他者に対して畏敬の念をもちながら寛容に他者を受け入れつつ、その一方で、わが町の伝統と歴史に誇りをもっている。この特徴により、オーメ市はとても住み心地がよく、訪問地として、とても興味深い地域である。



P5. 写真：オーメ市 - ラ・コスタ地域

5. 風習、伝統、祭り、イベント、地元ならではの慣習

祭り、イベント

クリスマスシーズンには、クリスマス・マーケットが開催される。市民が心待ちにしている人気イベントの一つである。何年も続く伝統行事となりつつある。時の経過とともに、その規模もだんだんと大きくなり、アーティストや、手工業職人

たちの参加によって、市民のみならず、ブレーシャからの訪問客や、他の地域からも参加者が集う有名なイベントとなっている。

この環境から、オーメ市のアルプス山麓で、地域の味、温かい料理、山の美味しい料理を提供するイベントが考案された。パン、ミニサラミ、チーズ、スパイスのきいた牛肉や猪肉のポレンタなどが振る舞われる。また、体を温めるのに欠かせないホットドリンクも用意される。特に、人気の焼きマロンの“ヴィン・ブルレ”や、お茶、紅茶、ホットチョコレートもある。

このように、お祭りの雰囲気でお祭りを歓迎し、マーケットでは郷土料理、田舎料理をほおぼり楽しむ良い機会を創り上げている。



写真：オーメのクリスマス・マーケット

P6.

毎年オーメ市内で開催される行事は、明るく楽しい、にぎやかな祭りやイベントだけではない。時には静かに瞑想に耽りじっくり思いを巡らす。この地域の大多数に支持されるキリスト教に結び付いた行事がある。

例えば、パスクワという復活祭の前に執り行われる、四旬節（復活祭前 40 日）の金曜日は、十字架巡礼（ヴィア・クルチス Via Crucis）と呼ばれる、教区練り歩きによって執り行われる十字架キリスト復活祭がある。

要所 14 か所、つまりキリストが死刑の宣告を受けた場所から、十字架にかけられるカルヴァリオの丘（別称ゴルゴダの丘）までのポイントを結ぶ巡礼である。

特に、“聖金曜日の十字架巡礼”、パスクワ復活祭前の日曜日の前日は、オーメ市においてとても有名な年中行事が行われる。居住地域のいろいろな通りが、居住者たちによってキャンドルや光で照らされ、その道を巡礼者たちがイエスの受難に思いをめぐらし、祈りながら、瞑想に耽りながら進んでいくのである。3 月中のある金曜日には、“人間による十字架巡礼”と呼ばれる祭礼が執り行われる。

歴史の長い行事で、それぞれの役に扮した、ほぼ全住民の数に匹敵する何百人もの人々が登場人物のいで立ちで、キリストの受難や、十字架にかけられるシーンを表現しながら、オーメ市庁舎のあるアルド・モーロ広場からサン・ミケーレ山

までの道のりを練り歩くのである。



写真 オーメ市・“生身の人間によって表現されるヴィア・クルチス Via Crucis
～十字架巡礼～”

12月26日は、最初の殉教者、サント・ステファノ（聖ステファヌス）に捧げられる祝日である。この聖人は、オーメ市の守護聖人である。サント・ステファノの祝日は、クリスマスの翌日を祝う日で、1947年に休暇と祝賀を一日延ばすために制定された。

1月6日は、エピファニアの祝日（救世主の御公現の祝日・主顕節、東方の2博

士がキリスト礼拝にやってきたことを記念する祭り) とされ、ベファーナ (Befana) とも言われる。

オーメ市では、オーメ市“アルプス山岳グループ”によって、市内の通りからサン・ミケーレ山にかけて、伝統行事である“人間プレゼーピオ”(人形の代わりに、人間が 2000 年前の古代の人々や様々な職業の姿を演じる、キリスト生誕模様が催される。

また“人間絵画”、旧約・新約聖書に出てくる寓話を表現した絵画も表現される。

アダムとイブの創造から始まり、ローマ軍とヘロデの王宮、そしてイエス・キリスト生誕の掘っ立て小屋までが表される。そして、この地域ならではの特徴としてあげられるのは、生まれたてのイエスへの贈り物として、羊の生皮を持参した羊飼いや、馬に乗ったマジ王の到着模様を表した部分である。



P7. 写真：オーメ市・“人間プレゼーピオ（キリスト生誕模様）”

黙とうの為に使用される照明装置には芸術的な要素があり、光とキャンドルで聖ステファノ教会の最上祭壇を装飾する複雑なメカニズムを駆使した木製の装置である。11月のはじめの3日間で行われる。このミサは歌と祈りからはじまり、この地域の故人を追悼するための祭礼である。これは、100年も続く伝統行事であり、ブレーシャや、ロンバルディア州の他の地域でも開催されている。



写真：オーメ市、聖ステファノ教区教会の黙とうの際に使用される照明装置

P8.

いわゆる、“古の焚き火
(火あぶり・中世の火
刑)”と呼ばれるこの祭り
は、四旬節のちょうど折
り返し、半分の期間が過
ぎた時期の夜に執り行わ



れる。たき火をとり囲んで、ぼろ布や雑巾をまとった人形が燃やされるのを見つ
める。そびえたつ人形の山を焼くのには、悪を焼き倒して撃退し、厳しい冬の季

節に別れを告げる意味がある。

木片に火をつける前に、自分自身の心にある恐怖を文字やイラストで紙に描きだし、これを木片に挟み、人生におけるすべての良くないことと一緒に、火にくべるのである。

祭りを開催してはならない特別な日時

3月から4月にかけて毎年行われる、キリスト教祝日の中で一番大きなイベント、パスクア（生誕祭）を迎える前の、40日間の四旬節の中では、キリスト教においては、豪華な食を控えるよう、そして、懺悔の為に慈悲を仰ぐ祈りを深く捧げるように説かれている。

かつてはこの時期に祭りごとを行い、豪華な昼食を食べることを避けていた。しかし、今日ではこの習わしはほぼ耳にしなくなり、キリスト教の信者の為にも、制限のある規律が減ってきている。現在でも残っている規律としては、四旬節の間、金曜日には、肉料理は食べない習慣になっている。

家庭での手料理や、自家製のアルコール飲料

伝統家庭料理の中でも人気のものは、長年の歴史の中で引き継がれブレーシャ

県の他の地域でもよく食されている。ブレーシャ料理のオリジナルレシピはとても素朴で、素材も無駄がないようにと考えられてきた。

オーメの伝統料理でよく使われる、この土地ならではの食材といえば、食肉である。飼育された動物の肉もあれば、ジビエ肉もある。また、様々な野菜、卵、オリーブオイル、小麦、とうもろこしが使用される。

オーメ市の各家庭の食卓に欠かせないのはなんといってもワイン。オーメのみならず、言わずと知れたイタリア料理には欠かせない飲み物である。ワイン生産の起源については何千年も遡り、イタリア全土で作られるようになった。

オーメ市もワイン畑に囲まれており、おいしくて素晴らしいワインが生産されている。各家庭では、特別なシーンで開けるワインは必ず別に保管してあり、食事には自家製のワインを合わせる習慣がある。また、ワインは様々なレシピの材料としても活躍し、例えばパスタに合わせるひき肉のラグーソースや、ラザニア、スペッツァティーノ（牛すじの煮込み料理）などがある。

また、よりアルコール度の高い蒸留酒を好む方には、グラッパトという酒類もあり、職人による手作りのその歴史は中世にまで遡る。グラッパは、ぶどうの種と、果汁を絞り終わったあとに残る果皮から蒸留され造られる。

P9.

また、他の自家製アルコール酒も造られ、特に冬の間、各家庭で少しずつ消費される。

その他、オーメ市民の食卓にのぼる料理といえばポレンタである。その種類は、ホワイトポレンタ、イエローポレンタ、ポレンタタラーニャがあり、ゴルゴンゾーラチーズを絡めたり、ポルチーニ茸のソースで食したりと様々である。

ポレンタは、とうもろこしの粉で作られる料理で、昔はパンが手に入らない場合の質素な家庭料理であった。今日では、ロンバルディア州の家庭で祝祭日に必ず食される料理であり、年間を通して提供するレストランは数多くある。

ベルガモ地域の郷土料理といえば、カゾンチェッリという詰め物生パスタがある。ブレーシャの市民たちにも親しまれている料理で、ラビオリに似た半月型の卵パスタで作られる。

詰め物には、ビート（てんさい）とチーズに加え、豚肉や牛肉が使用される。ソースは、バターとセージ、粉チーズで調味され、家庭によってはパンチェッタやスペックといった、ベーコンに似た加工肉をカリカリに焼いたものを最後に加え、食卓へ提供する。

さらに、オーメ市で食されるお馴染みの郷土料理といえば、ロンバルディア風トリッパがあり、ミラノ料理から派生した一品で広く知られるようになった。当初は、農家で日常的に食されていた料理なのだが、現在では、その作り方も研究され進化を遂げた料理となった。

そして締めくくりのおすすめ料理は、農家で昔から食されていた串焼きである。今では、大切な機会やイベントの際にのみ作られ食される。作り方は、肉（豚、鶏、兎、鳥）を一口大に切り、じゃがいもと交互に串にさし、回転式オーブンで、ゆっくり時間をかけて料理する。味付けは溶かしバターと油脂、セージ、ロード、塩、その他のハーブ類。



写真：ブレシャ肉の串焼き

市民の間で広まった振る舞い

オーメ市民の間で、特に目立つ悪い習慣や振る舞いはあまり見られないが、日本と比べると日常行動の違いは間違いなくあると思われる。例えば、道端での紙ごみのポイ捨てにあまり注意を払わない。この状況から、若い世代には、ごみ掃除や片付けに興味をもってもらえるように市でごみ拾いデーを設けている。

オーメ市民はとても人懐こく、社会性に富んでいる。イタリア人のよく聞く特徴ともいえる、公共施設でも交通機関でも大きい声で話すことがよくある。知人同士であれば近づいて抱擁し挨拶する。これはもしかしたら、あまり好ましくない振る舞いに思われるかもしれないが、地域の伝統によると、相手への尊重が足りないと考えられがちだが、誠実な愛情表現であり、周囲の人々に対するオープンマインドの振る舞いなのである。



P10. 写真：オーメ市、針葉樹林の植物園

6. 居住地域

ローマ時代より、建築物やインフラともに、石造り、レンガ、木造の塀が建てられた。この建築用法は住居建築としても最古の技術の一つである。オーメ市の住居建築でも 900 年代中頃まではこの技法が用いられてきた。この建築システムでは、セメントか、もしくはモルタルとともに複数の素材を使用し、壁や柱、その他の部分が建築された。これらの建築物はとても歴史ある古いものなのだが、オーメ地域にいまも現存している。

街のエンブレムともいえるのが、オーメ市のボルゴ・デル・マッリオで、農村建

築が集約され建てられた代表的な場所である。その内部にはマッリオ・アヴェロ
ルディ博物館と、ピエトロ・マロッシ博物館がある。ボルゴ・デル・マッリオに
は歴史的文化的な価値ある建造物があり、6世紀が過ぎた今も、そのままの形を
残している。1430年に木製の日時計とともに石で造られた。絶え間なく引き継
がれてきたメンテナンスと、適正な保存方法のおかげで、“マッリオ・アヴェロ
ルディ”と呼ばれる、アヴェロルディ（が発明した）ハンマーによる鍛造施設は、
つくられた当初の機能がいまだに保たれている。

この居住地域は、一軒家のみならず、マンションなどの集合住宅についても鉄筋
コンクリートの柱とレンガの壁で建てられ、漆喰が頻繁にみうけられる。建物の
表面（カバー）と雨除けはたいがい薄い赤か茶色のテラコッタによって保護され
ている。窓枠と窓、扉はだいたい木製である。

一般的な住居は複数の部屋があり、しきりや扉でしきられている。部屋の機能に
よって違いがみられる。通常、各建物にはキッチンと居間、複数の部屋とトイレ
がある。昔ながらの家は、キッチンとランチルームに関しては、赤褐色か茶色の
テラコッタによって調理する部屋と、食事をする部屋とに分けられている。こう
した配置設計は現代でもわりと好まれる。というのも、調理中の匂いが食事をし

ている部屋に入らないように分けることができるからだ。しかし現代では住居の家の面積は小さくなっている。そしてまた、家族の人数もかつてのようには大人数ではない。

P 1 1 .

こうした理由から、空間を広く使うために、調理する一角と、食事をする部屋が一体化した、“オープンスペース”が好まれる傾向にある。

オーメ市には土地の広い邸宅（200～400 平米）がいくつかあるが、大多数の家族層は 70～100 平米ほどの集合住宅に住む。古い家を取り壊すか、またはリノベーションでモダンな家が建つこともある。

オーメ市の名前の由来を紐解くと、“オーメ”という言葉の表現で信頼性のある訳の一つに、“石造りの家”という意味がある。おそらく、岩だらけの地域に建設する住居や、建築資材として石造りが中心の家の住居の形態を示すのに、“オーメ”という言葉が生まれたと考えられる。

ケルト語で hom とは、“家”や“住居”を意味し、そこから派生したラテン語では domus、アングロサクソン語では home、となるのである。また他の研究者によ

ると、オーメという言葉は、古代ラテン語では“hometum”=農村の家という意味や、“homete”=ブドウ畑の小区画という意味もあるという。



写真：オーメ市、教区教会の歴史的な中心地区

7. 学校の種類と、重要視されている教育施設

イタリアでは義務教育は6歳から16歳までの年齢の期間と定められている。その構成は、小学校は5年間、中学校は3年間、大学に行く前の高等教育は5年間となっている。

オーメ市には、2歳児から5歳児までが通う幼稚園があり、そこには0歳児から2歳児までの保育も付随する。6歳から10歳までの児童が通う小学校と、11歳

から14歳までの学生は中学校、または第二番目の初等教育機関という学校に通う。続いて、学生たちはブレーシャの街へ移動し、高等教育を受ける。(高校、または専門学校)。もしくは、オーメ市内にある職業訓練校に通う。毎年、オーメ市は“学ぶ権利に基づく計画”に沿って、奨学金制度が含まれた、各学校への支援サポートを行う。

子供たち、青年たちの教育にはもちろん、学校が重要な役割を果たすのは言うまでもなく、そこには家庭、教会、社会コミュニティのサポートがあり、すべての協力のもとで成り立っている。学校では基礎的な教科の授業(国語イタリア語、数学、外国語など)はもちろん、道徳や生命、環境への敬意、社会性、創造性、友情、コミュニケーション能力、共生などについても学ぶ。また、倫理・道徳、寛容・許容、気高さ・優雅さ・優しさ、団結など、日常生活の中で、家庭や教会で教えられていることも重要な要素であると考えている。



P12

写真：オーメ市立図書館

8. 史実と、歴史的人物

オーメ市は Homis という市名で 1274 年に正式登録されており、すでに古代ローマ時代や青銅時代にもこの地域には人間の定住が始まっていた。いくつかの古代住居に装飾されたフレスコ画からも、中世の時代にオーメ市は交易に欠かせない通行の要所地であったことがうかがえる。しかしながらオーメは、フランチャコルタ地域の他の街と同じ運命を辿り、1426 年から 1797 年までヴェネツィア共和国に統治された。この当時、農業を主とした経済状況は劣悪だったが、16 世紀以降は養蚕業と、水力駆動（水車）のハンマー（による鍛造）の発達に

よって市民の生活レベルが向上していった。

19世紀の初め頃より、歴史的観点からみてオーメでは重要な出来事が起こり、続いてロンバルディア州、そしてイタリア統一へと移っていった。

オーメの歴史的な重要人物といえば、やはり、長い年月をかけて市民の繁栄や豊かさに尽力した市長や司祭があげられる。特に教区司祭はおらず、カトリック（宗教）の牧師が存在し、これらの責任者や地域の監視員・管理人たちが精神面、文化面、社会的尽力を通して、市民たちの団結や結束を奨励していた。

特に市民の記憶に残るのは、牧師ピエトロ・バットラである。1692年彼の遺言状により財産が市に寄付され、その用途は主に、貧困層の子供たちの為の学校建設であった。この牧師は、“モンテ・グラナーリオ”（＝貧しい農家に対し、田植えの為の小麦の種を貸し出す、16～17世紀にかけて多く存在した組織）の出身でもあり、地域の貧困層の人々の唯一の支えであった。後年には、オーメ出身のトマーゾ・ボンゲッティ（1750～1823）という、熱心で学識のあるカプチーノ会修道士が存在した。上品で誠実な詩人、控えめな哲学者、フランス革命思想の悪用に対する厳格な批評家であり、社会福祉としての学校建設の必要性を訴える粘り強い擁護者でもあった。



P 1 3

写真：オーメ市、モルティ教会

9. 文化、スポーツ、宗教 - 著名人

オーメ市には 1989 年に誕生した児童音楽アカデミーがあり、講義レッスン、出



版、コンサート、コンクール、セミナー、研究所を通じて音楽文化を広めることを目的としている。

ボルゴ・デル・マッリオ（マッリオ地区）は、歴史的にも文化的にも重要な場所である。外壁の内側、敷地内にはマッリオ・アヴェロルディ（水車駆動ハンマー

による鍛造施設）があり、ブルーザフェットロ（Bruzafer）アートと呼ばれる鉄加工技術が残された、唯一現存する最後の歴史的施設である。ここでは、鍛造デモンストレーションの中で、農具や調度品の製造に必要であった古代の鉄加工技術を見ることができる。

マロッシ博物館（La Casa Museo Malossi）には、絵画、家具、デザイン、刀剣類、鉄砲のセレクト品といった、貴重なアンティーク調度品が保存されている。

スポーツでは、子供にも大人にも親しまれ人気があるのは、やはりサッカーである。続いて、人気順に並べると、バスケットボール、器械体操、バレーボール、水泳である。市内には、サッカー競技場が6か所、体育館が1か所、小さなスポーツジムが1つある。

また、オーメ市内で一番支持されている宗教は、その歴史的文化的背景からもキリスト教・カトリックである。

定期的に祈りを捧げ、宗教儀式やその役割があるミサに参列している信仰心の篤い市民の割合は全体の20%ではあるものの、教会やチャペルの数の多さが証明するように、カトリックが市民の間に一番根付いているといえる。年間における祝祭事、特別な時期に行われる儀式などには、多くの市民が参加している。

芸術分野でオーメ市に深く根付いた著名人といえば、彫刻家のフランチェスコ・メディチ（1924～2021）があげられる。古代研究者のピエトロ・マロッシ、鍛冶屋のアンドレア・アヴェロルディと共に、オーメ市の鍛造施設がある地区、ボルゴ・デル・マッリオの歴史上、欠かせない人物である。

さらに、世界的にも有名なアーティストであり、画家、彫刻家でもある、ジュゼッペ・ベルゴミ（1953年～）があげられ、イタリア国内でも国外でも、数多くの芸術作品を創り上げた人物である。また2000年には、彼のブロンズ像の代表作である、“人とイルカ、平行線上に揃う足並み”、（水族館にある銘板上の作品名は「人・建築・イルカ」Uomini Architettura Delfini）が制作され、日本国内の名古屋水族館に収められている。

P14.

スポーツ界では、自転車ロードサイクルで有名な、レナート・ボンジョーニ、エルネスト・ボーノ、サッカー界では、ダニエレ・ボネーラが人気を博し、モトクロスの世界ではパブロ・ペーリ、その他には現在も健在な騎士、アントニオ・デ・マトラが有名である。哲学者であり、有能な植物学者でもある彼は、オーメ市植物園の保護を担い、市民からも広く尊敬される人物である。



(ジュゼッペ・ベルゴミー：“人とイルカ、平行線上に揃う足並み”、日本の名古屋水族館)

注)情報検索したところ、水族館の銘板にある作品名は「人・建築・イルカ」Uomini Architettura Delfini とあった。

10. 主要ビジネス：商業、工業、農業、造林業 等

オーメ市の経済産業は多様化している。

オーメ市内で活動する小規模産業は多く存在する。

代表的なのは、設備規模が最大のモーレマブ



(MoleMab) 社。バネ、研磨ディスク、ダイヤモンド加工具の製造業者である。
また、フォレツリ (Forelli) 社 石材工業。
より大多数を占めるのは農業であり、観

光業ではブドウ栽培農園でのワインセラーでのワイン販売、アグリツーリズム

などを行う企業が多い。有名なワイン、フランチャコルタの製造はこの土地にとって、またオーメの経済にとっても、重要なリソースである。このワインは、世界的レベルで認められており、日本にもかなり普及しつつある。オーメ市内の重要なワイン製造業者は次の通りである。

マジョリーニ (Majolini)、ラ・コスタ・ディ・オーメ (La Costa di Ome)、アル・ロコル (Al Rocol)、ラ・フィオリータ (La Fiorita)、ボンゾーニ (Bonzoni)、プロツァ (Plozza)。

地場産業は、オーメ市が補助しているものの、その商業活動の規模は小さい。また、市内の商店の数が少ないのは購買傾向が時代と共に大きく変化したためである。近年では、物流が市民の目を惹く大きなショッピングセンターへと流れる傾向がある。商品数と、多種にわたるラインナップ、品ぞろえの良さで住民のニーズにこたえている。

小規模店舗とは異なる流通ルートに注目すると、商業活動は外国への輸出、ネット販売が大成長しており、ネットショッピングはオーメ市民の購買意欲を高め満足感を与えている。

オーメ市には古くからの温泉浴場が存在し、公衆浴場に新たな技術を加えた施設は一時期繁盛していたが、現在は経済的な理由で営業していないのが現状で

ある。



P 1 5 写真：有名なワイン・フランチャイザ

11、環境保護への取り組みと、地球温暖化対策

オーメ市は、持続可能な農村開発の政策によって、ロンバルディア州全体の中でスピーゲ・ヴェルディ賞（Spighe Verdi この直訳は、緑の穂という意味）を受賞した2都市のうちの1都市に選ばれた。この賞は、地域全体の環境と生活品質にとって、有益な土地の管理運営（方針）を採択した市町村に向けた FEE（環境

教育財団) の国内支援プログラムである。

公的補助金を受けながら取り組む中で、この栄えある賞の受賞に至った活動をいくつかあげると、以下のとおりである。

- これまでとは異なる新たなサービス運営により (効率化され、) 収穫作業が78%に。
- 市民と協力して行う地域清掃活動 NetOmel プロジェクト
- 新しい PGT (Piano di Governo del Territorio = 土壌に関する国内計画) のもと、土壌の消耗を抑制した環境保護
- 森林、エコ農場エリア、保護観察区域、獣道などの保護エリアを決める公共エコロジー・ネットワークの設置
- 水圧調節による水流網の管理と、急流水路にある植物伐採
- 公共緑地の保護、公共の場の設備 (備品) の再整備と管理
- 環境へ最大に配慮した、サステイナブルな生活スタイルの促進活動
- 使い捨てプラスチックの使用放棄
- アミアンタス (アスベストの一種) 排出処理モニター監視
- 公共施設のエネルギー効率強化
- “ハチとの共生”システムへの参加、長期プロジェクト

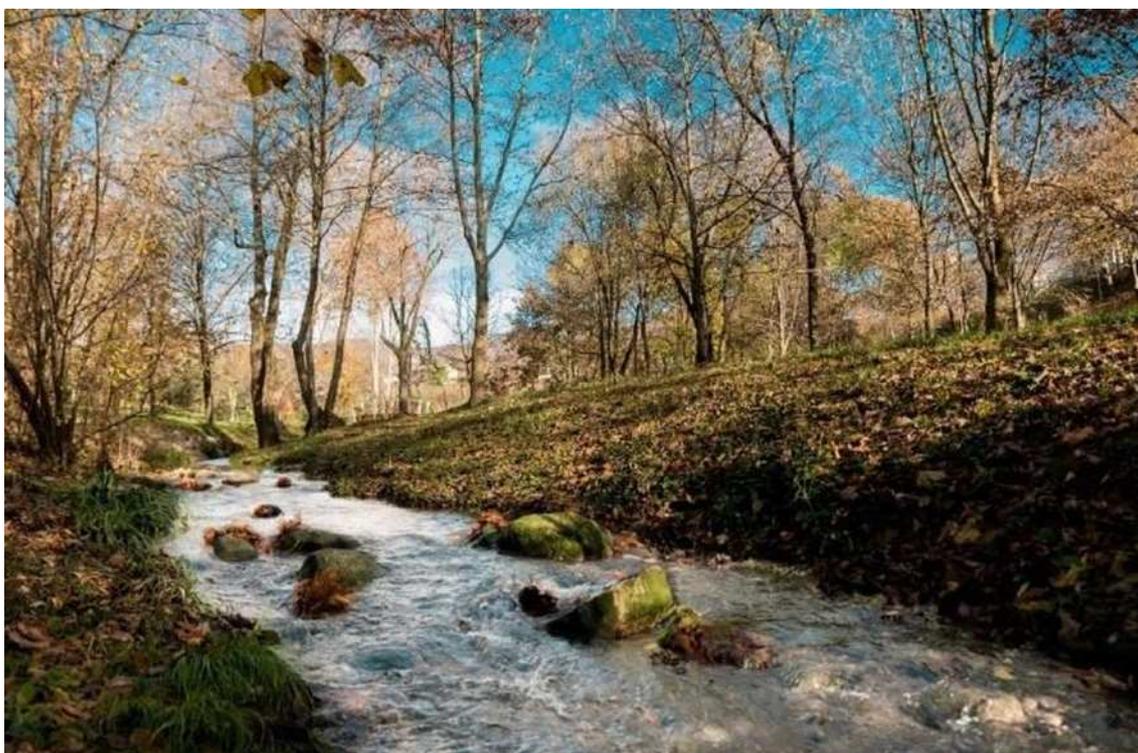
特に州教育機関(Istituto Comprensivo) との重要テーマへの協力体制

●廃棄物の違法投棄に関して、世論を喚起する為の NetOmel (地域清掃活動)

プロジェクトの拡大

P16

●ブレーシャ学術大学との協定のもと、植物園の実現へむけた企画の継続的な進展。



写真：植物園のオークの木

12. 主要行事

年間を通してオーメ市の劇場でフェスティバルや音楽祭が開催される。ブレーシャをはじめ、様々なイタリア国内の都市との協力により、芸術祭や文化的催し

が実現されている。

音楽はオーメ市の生活に欠かせない文化的要素である。一年を通して、ロックからコーラス、オーケストラのクラシック演奏からソリスト歌手のリサイタルに至るまで、様々なコンサートが開催される。

夏には、音楽フェスティバルが催され、ボルゴ・デル・マッリオ周辺では、ブルムフェスティバル（エレクトリックミュージック）、ソメンフェスタ（ロック）、ディルヴィオフェスティバル（インド音楽）などが開催される。

9月には、イタリア全国から多くの人々が訪れるフランチャコルタ・フェスティバルが開催され、オーメ市も参加している、ワイナリーを開放する有名なイベントである。一幅の名画のような丘に囲まれた歴史地区や城、教会の中でリラックスした時間を過ごしながら、伝統的なワイナリーの葡萄酒を味見しつつ、文化と自然に触れ、ワインと料理を堪能する3日間の試飲イベントである。

また、ここ数年開催されている、歩道・漫画フェスティバルは、クリエイティブで興味深い行事となっている。文化や、他のアートと組み合わせ、毎回テーマを掲げて開催されている。直近の開催テーマは、“日本文化”であった。



写真：オーメの植物園内の日本庭園

P17

13. 政治の安定性

現在のオーメ市長、アルベルト・ヴァノッリオ (Alberto Vanoglio) は、“情熱の街オーメ”の市民リスト (リスタ・チヴィカ Lista Civica) 代表である。2019年

に市長に就任、2024年に再選。これにより長期計画の遂行が可能となり、市政が安定している。

市議会は市長と12人の市議会議員（8名の与党議員、4名の野党議員）から成る。



写真：オーメ市庁舎



P.18 写真：戦争犠牲者を追悼する公式行事

14. オーメ市の市政と現在の取り組み

ロンバルディア州の大多数の地域と同様、オーメ市は
土壌の水質と地質の不均衡（アンバランス）という、重要課題に取り組む必要がある。ここ数年で、土壌と住民生活の関連性、バランス、安全性に関する厳正なテストを行った。

この現象の要因は多岐にわたり、人間の行動に起因するものや、他にも気候変動、経年劣化対策に必要な保全の欠如など、多々あげられる。またさらに、人間による制御が及ばない自然そのものが、少しずつ周りを取り巻くこれらの要因に加勢していることも考えられる。

オーメ市行政の最大の懸念の一つは、気候変動に起因するリスクであり、ここ数年は頻繁に極端な大気現象がみられる。たとえば、ゲリラ豪雨は山崩れや土砂崩れを容易に起こす。また、地震はさほど頻繁に起こるわけではないが、雨による急流が土壌の浸食の要因となり、（市民生活にとって）望ましくない結果を引き起こすことになる。

オーメ市内の何か所か、特に水流が近い地域ではこういった現象が重なることで、農業への打撃となったり、交通アクセスに悪影響が出たり、生活に支障が出

るリスクがある。

オーメ市は、課題に本気で取り組む挑戦をしている。地域を流れる水路を清らかにする保全対策を実現。水路網の徹底した管理システムを設置し、Gandovere ガンドヴェーレ、Martignago マルティニャーゴ、Martinola マルティノーラ溪谷、Cornola コルノーラ溪谷、Morandi モランディ溪谷、Delma デルマ溪谷、といった渓流水路の流量調節や草刈りで管理を行うことによって、予測される被害や、自然災害を最小限にとどめる努力をしている。

交通網の安全整備もオーメ市行政の中で非常に優先度の高い取り組みのひとつである。自動車、一般車両の速度を緩めるシステムも実用中。

P19

歩行者や自家用車を使用しない人々の安全性の向上のため、サークル状の歩道（歩行者用通路）を建設。これにより住民やこの地域へ訪れる人々が生活しやすくなった。

より持続可能な（サステイナブルな）生活スタイルの促進や、徒歩または自転車移動の促進キャンペーンも市で開催している。

また、EU 政策の元、環境保護と経費節減の双方の視点に立って、民間施設、公共施設のエネルギー効率化プロジェクトが始動した。



P19 写真：オーメ市、サン・ミケーレ教会

15. 国内外の都市との交流成果

現在、オーメ市では特定の姉妹都市提携を結んでいる市町村はないが、スポーツ交流や文化交流、社会交流、市民交流が行われている。交流先は、市町村関連の公的機関もあれば、市民や、ボランティア団体などもある。他の都市との結束を強めたり、関係が発展したりと、新たなチャンスをつかむことにつながり、視野

が広がる恩恵を受けられる。

たとえば一つ例をあげるならば、最近では、これまでとは異なる形態の交流事業がある。2023年5月、豪雨による川の氾濫の被害を受けたチェゼーナは、エミリア・ロマーニャ州の都市であるが、オーメ市はこの市民たちとの絆、そして団結を表明し、この街の再生復興の為に寄付金を募った。こうして自然災害の被害を大きく受けた街の復興のために貢献しようと集めた寄付によって、二つの都市の間に親しみが生まれ、協定が結ばれることが決まった。

オーメ市民にとっては、災難でさえも、災害に見舞われた地域と手を取りあって、人とのつながりを感じながら連帯して生きるチャンスになる。それは、第三世界の地域との接触や交流でも同じことがいえる。



P20 写真：オーメ市、アヴェッロ（Avello）の聖マリア教会

16. オーメ市の交通 — 利用しやすさに対応した構造

オーメ市民の主要な交通手段は、必然的に自動車となり、短距離でも多く利用される。また、自転車専用道路や短い距離の定められた通路でのみ、自転車やスクーターの使用が奨励されている。専用通路に関しては、週末に体を鍛える目的でオーメ市にサイクリングに訪れる人々にも使用される。オーメ市は小さな町なので都会の渋滞はほとんど見られない。また交通事故も少ない。

前述の通りオーメ市には2つのホテル（サン・ミケーレ San Michele ホテル、ホ

テル・ラフォンテ La Fonte) がある。アグリツーリズムは 5 件 (アグリツーリズム・ラフィオリータ La Fiorita、ワインとアグリツーリズム・アルロコル Al Rocol、アグリツーリズム・イドゥエアンジェリ I Due Angeli、アグリツーリズム・アルポッジョ Al Poggio、ホテル・カーザジャッラ Casa Gialla)、その他に朝食付き宿泊施設 (B&B) が数多くある。

17. オーメと近郊都市を結ぶ交通経路

オーメ市と近郊都市を結ぶ公共交通機関は、大型バスが整備されている。また、オーメからブレージャへの直行バスは、平日 1 時間ごと、休日は 1 日に 2 便、運行している。また、イゼオ湖に直行する大型バスもある。

鉄道の最寄り駅は、パッシラーノ駅 (Passirano) と、パデルノ駅 (Paderno) がある。オーメ市からさほど遠くない、フランチャコルタ内にある市町村であり、ロンバルディア州でとても重要な鉄道ライン。より長距離移動が必要な場合には、ブレージャ駅 (Brescia) か、ロヴァート駅 (Rovato) の利用が推奨される。

18. オーメ市内と国際空港を結ぶ交通経路

オーメ市から最も近い国際空港は、カラヴァッジョ・ディ・ベルガモ・オリオ・

アル・セリオ国際空港（Caravaggio di Bergamo Orio al Serio）である。乗り換えが必要なバスや電車などの公共交通機関よりも、プライベートカーや、タクシーの利用が推奨され、オーメ市内と空港間を 20 分以内で移動可能。また、オーメからさほど遠くはない空港としてあげられるのは、ミラノにある国際空港（リナーテ Linate 空港・マルペンサ Malpensa 空港）である。



P21. 写真：オーメ市、ボルゴ・デル・マッリオ

詳細情報につきましては、オーメ市役所へ直接お問い合わせください。

オーメ市役所

Piazza Aldo Moro, 1 -35050- Ome (BS) Italia

電話：+39 030652025

e-mail: segreteria@comune.ome.bs.it

<https://www.comune.ome.bs.it/>

<https://www.facebook.com/@ComuneOme>

<https://www.instagram.com/comune.ome/>